

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：35413

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380819

研究課題名(和文)福祉実践における新たな参加・協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの体系化

研究課題名(英文) Systematization of the reflecting processes as a new participation and cooperation technique in welfare practice

研究代表者

矢原 隆行 (Yahara, Takayuki)

広島国際大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：60333267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：国内外の研究成果を収集・整理し、多様な福祉実践の場における参加と協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの有効性の検討をおこなうため、文献研究、北欧における視察調査、国内における協働的アクションリサーチを実施した。文献研究および海外での視察調査により明らかとなった多様な領域でのリフレクティングの活用実態と、その基本となる理論のまとめ、さらに、精神保健福祉専門職による研究会、および、大規模社会福祉法人をベースとした協働的アクションリサーチのプロセスと結果については、学術論文、学会報告、著書の形で広く発信をおこなった。

研究成果の概要(英文)：In order to collect and organize research results both in Japan and overseas, and to study the effectiveness of the reflecting processes as the participation and cooperation in various welfare practice fields, we carried out literature research, exploratory visit to Northern Europe, domestic collaborative action research. We summarized the actual situations and the theory of utilization of the reflecting processes in various areas that were clarified by literature research and exploratory visit. In addition, we have disseminated widely in the form of academic papers, academic reports and books on the processes and the results of the collaborative action research based on the research group by PSW and the large social welfare corporation.

研究分野：社会学

キーワード：リフレクティング・プロセス リフレクティング・トーク 臨床社会学 ケア 多職種連携 協働 アクションリサーチ ダイアローグ

## 1. 研究開始当初の背景

近年、対人援助者が抱える諸々のストレスや「燃え尽き症候群」といった困難さについては、きわめて広く認識されている。対人援助に携わる人材の不足、福祉職や看護職等における離職率の高さも社会的課題として顕在化しており、その要因として、仕事に「やりがい」を感じられない現状や、対人援助専門職を取り巻く多様なレベルでのサポート不足、組織内・組織間・機関内・機関間・同職種内・多職種間・当事者（当事者家族）間等における連携・協働の不十分さが指摘されている。

しかし、こうした課題に対して、対人援助者への「ケア」は、職場におけるメンタルヘルスなど個人の心理的ケアに焦点を置いた取り組みに還元されがちであり、各現場において重要な役割を担うべきスーパーバイザーの質的・量的な不十分さも各領域で明白な課題である。さらに、多様な福祉実践の現場での当事者をも含んだ「参加・協働」のための具体的方策にいたっては、まだまだ国内において、効果的な知識や技術が不足していると言わざるを得ない。こうした現状を踏まえるとき、当事者の参加をも視野に入れながら、「ケアする人びと」をケアし、サポートするための具体的な参加と連携・協働の技法の充実について検討することは、我が国の福祉実践の領域において急務である。

こうした状況を踏まえ、応募者が継続的にその有効性を研究し、実践を重ねてきたのが、トム・アンデルセンによって提唱された「リフレクティング・プロセス」という画期的なコミュニケーション・デザインである（Andersen 1987）。この方法のエッセンスは、異なるコミュニケーション・システム（複数のチーム）間のヘテラルキカルな会話の仕組みにある。すでに世界各地の対人援助領域で応用が試みられているこの方法について、国内では、未だその研究はきわめて限定的な範囲でしかなされていない。

## 2. 研究の目的

(1) 新たな参加・協働の技法の有効性の検証のため、本研究では、その前半部分(2014年度から2015年度)において、応募者自身のこれまでの研究活動を含む、国内外の研究成果を整理し、多様な福祉実践の場における参加と協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの有効性の検証とをおこなう。検証作業の一環として、国内外における当該テーマに関する先行研究の包括的レビュー、これまでに培ったネットワークを駆使した国内外の実践者・研究者からの直接的情報収集、研究会等の形式でのリフレクティング・プロセス実践の継続と予備調査、パイロット・スタディーをおこなう。

(2) 多様な福祉実践の現場での技法活用を可能にする具体的プログラムの開発と体系化のため、本研究では、その後半部分(2015

年度から2016年度)において、前半の検討を踏まえ、実際の福祉実践現場で活用可能なリフレクティング・プロセスを用いた参加・協働技法の具体的プログラム開発と、その教育・実践・評価プロセスの体系化を試みる。具体的には、複数の福祉実践の場（高齢者福祉施設における多職種連携、精神保健福祉活動における機関間連携、地域福祉活動における住民参加）で、当該プログラムを実際に試行、評価し、必要な改善をおこない、改訂版のプログラム構築までを目指す。このことは2007年度以来の研究プロジェクトの集大成でもある。

## 3. 研究の方法

本研究では、研究方法の中軸として協働的アクションリサーチの手法を用いることにより、複数の福祉実践の現場との協働的な取り組みのなかで、リフレクティング・プロセスを応用した参加と協働のための具体的な教育・実践・評価のプログラムを開発する。研究の前半部分(2014年度から2015年度)では、多様な福祉実践の場における参加と協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの試行と調査による有効性の検証に焦点を置く。研究の後半部分(2015年度から2016年度)では、前半の検討を踏まえ、実際の福祉実践現場で活用可能なリフレクティング・プロセスを用いた参加・協働技法の具体的プログラム開発と、その教育・実践・評価プロセスの体系化を試みる。こうしたプロセスの全段階は、研究者と参加者である対人援助専門職との間の協働として遂行される。

## 4. 研究成果

(1) 2014年度は、研究代表者自身のこれまでの研究活動を含む、国内外の研究成果を収集・整理し、多様な福祉実践の場における参加と協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの有効性の検討をおこなった。具体的には以下の通り。

国内外における当該テーマに関する先行研究の包括的レビュー、これまでに培ったネットワークを駆使した国内外の実践者・研究者からの直接的情報収集、研究会形式でのリフレクティング・プロセス実践の継続等に取り組んだ。

8月末から9月初旬にかけては、リフレクティング・プロセス活用の先進地域であるデンマークにおいて、各分野での活用状況について幅広く情報収集を実施するとともに、ロスキレで開催されたリフレクティング・プロセスに関する国際会議に参加し、各地の研究・実践の最新状況について、北欧を中心とした欧米圏の研究者・実践者らと情報交換した。

続いて訪問したフィンランドにおいては、リフレクティング・プロセスとの関連が深く、近年、世界各地で注目が高まるオープン・ダイアローグの発祥の地であるケロプダス病

院を訪問し、その実践現場にも参加しつつ、情報収集に取り組み、その成果について国内の研究会や学会誌等に報告した。

(2) 2015年度は、協働的アクションリサーチを通したリフレクティング・プロセスの有効性の検証に向け、以下のような取り組みをおこなった。

精神保健福祉専門職による研究会をベースとした精神障害者向けB型作業所における利用者と職員のリフレクティング・トークの実施をおこなった(広島県)。具体的には、就労継続支援B型事業所における利用者・職員間の対話を開くことを目的に、演者らRPP研究会のメンバーが、リフレクティング・トークにおける会話の進行役、ファシリテーター役を担当した。実践の枠組みとしては、イシュー提供者グループ、利用者グループ、職員グループの三つのグループにおける会話を順に折り重ねながら、対話的空間を醸成していった。その結果、利用者側からも、職員側からも、肯定的評価を得た。

社会福祉法人をフィールドとした医療・福祉の専門職間連携、組織間連携の実態調査とその分析結果に基づくリフレクティング・プロセスの導入をおこなった(山口県)。具体的には、大規模社会福祉法人の全職員を対象とする連携実態調査を実施し、その分析結果として各部署・各職種間の連携をめぐる認識のズレを明らかにし、その結果を全職員が参加可能な研修会の場で共有するとともに、連携推進におけるリフレクティング・プロセスの働きについて説明し、実践研究への導入を促した。その後、各部署間のリフレクティング・トークを実施するとともに、効果測定をおこなった。

国外の先進地域におけるリフレクティング・プロセス実践状況の整理と紹介。

(3) 2016年度は、リフレクティング・プロセスの理論的整理、および、参加・協働のための汎用的プログラムの構築とその社会発信をおこなった。また、日本国内では知られて来なかった北欧の刑事司法領域における参加・協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの活用実態についての現地調査をおこなった。具体的には以下の通りである。

精神保健福祉専門職による研究会をベースとした利用者と職員のリフレクティング・トークの実施とその内容分析(広島県): 2008年に広島県にて始動したRPP研究会をベースに、これまで取り組んできた多様なリフレクティング形式の対話のワークの振り返りと理論的整理をおこなった。その成果を精神保健福祉士学会にて共同発表した。

社会福祉法人をフィールドとした医療・福祉の専門職間連携、組織間連携の実態調査とその分析結果に基づくリフレクティング・プロセスの導入(山口県): 病院、高齢者福祉施設、障害者福祉施設等を有する当該地域の医療・福祉の拠点となる組織において、多職種間連携、多組織間連携を推進するため、

協働的アクションリサーチを実施した。具体的には、全職員を対象とした連携の実態調査の分析結果にもとづき、職種間・部署間のリフレクティング・トークの導入とその評価を進めた。

国外の先進地域におけるリフレクティング・プロセス実践状況の整理と紹介: デンマーク、スウェーデン、ノルウェーを訪問し、日本国内では全く知られて来なかった北欧の刑事司法領域における参加・協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの活用実態について現地調査をおこない、その成果を各学会での報告や学会誌への論文の形で発信した。

以上に加え、2016年度には、我が国における初の体系的なリフレクティング・プロセスの基本書となる『リフレクティング: 会話についての会話という方法』を単著として刊行した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

矢原隆行、北欧の刑務所におけるリフレクティング・トークの展開、更生保護学研究、査読あり、(10) 58-65、2017年

矢原隆行、オープンダイアログを殺さないための二様のリフレクティング、N:ナラティブとケア、査読なし、(8) 27-33、2017年

池田明子・岡本晴美・矢原隆行、"Tree of Life (人生の木)"を用いた学生と高齢者の協働ワークショップ 今治市関前地区小大下島における実践、広島国際大学医療福祉学科紀要、査読なし、(12) 43-58、2016年

矢原隆行、社会学的社会的支援論の射程解題にかえて、西日本社会学会年報、査読あり、(14) 1-5、2016年

矢原隆行、「リフレクティング」とは何か。どうすれば導入できるのか、精神看護、査読なし、19(3) 217-225、2016年

矢原隆行、オープン・ダイアログ(開かれた対話)の可能性 北欧における展開の状況とその背景について、介護福祉教育、査読なし、21(1) 32-39、2016年

矢原隆行、コンテキストに風を通す リフレクティング・プロセスとオープン・ダイアログ、N:ナラティブとケア、査読なし、(6) 77-83、2015年

矢原隆行、リフレクティング・プロセスからオープン・ダイアログへ、家族療法研究、査読なし、31(3) 294-298、2014年

[学会発表](計8件)

矢原隆行、ナラティブコミュニティワークにおけるTree of Life(人生の木)の応用可能性、日本家族研究・家族療法学会 第33回大会 2016年9月17日、ハウステンボス(長崎県佐世保市)

矢原隆行、リフレクティングの観点から、日本家族研究・家族療法学会 第 33 回大会大会企画、オープンダイアログと我々は、どこから来て、どこへ行くのか？ 2016 年 9 月 16 日、ハウステンボス（長崎県佐世保市）

矢原隆行、リフレクティング・トークを用いた利用者・職員間の開かれた対話の試み：理論的背景と実践の枠組、第 15 回日本精神保健福祉士学会学術集会、2016 年 6 月 18 日、海峡メッセ（山口県下関市）

矢原隆行、オープン・ダイアログ（開かれた対話）の可能性 北欧における展開の状況とその背景について、第 22 回日本介護福祉教育学会（日本介護福祉学会中国・四国地区公開講座共同企画）、2015 年 9 月 12 日、ANA クラウンプラザホテル広島（広島県広島市）

矢原隆行、デンマークにみる、北欧におけるリフレクティング・プロセス受容 とオープン・ダイアログの展開、日本家族研究・家族療法学会、第 32 回大会 2015 年 9 月 5 日、日本女子大学（東京都文京区）

矢原隆行、社会的支援の社会学 制度化をめぐる功と罪、西日本社会学会第 73 回大会 2015 年 5 月 17 日、山口県立大学（山口県山口市）

矢原隆行、臨床社会学の方法としてのナラティブ・コミュニティ・ワーク、第 128 回日本社会分析学会例会、2014 年 12 月 13 日、台北市（台湾）

矢原隆行、オープン・ダイアログ（開かれた対話）の可能性：10 年後の精神保健医療福祉を見据えて、第 13 回日本精神保健福祉士学会学術集会、2014 年 6 月 19 日、大宮ソニックシティ（埼玉県さいたま市）

〔図書〕(計 2 件)

矢原隆行、リフレクティング：会話についての会話という方法、ナカニシヤ出版、2016 年、168 ページ

小森康永、奥野光、矢原隆行（共訳）、会話・協働・ナラティブ：アンデルセン・アンダーソン・ホワイトのワークショップ、金剛出版、2015 年、312 ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

矢原隆行 (YAHARA, Takayuki)

広島国際大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：60333267